関連団体

一般社団法人ニューガラスフォーラム・第3回定時総会記念講演会聴講記

臥龍経済日本の中小企業の行方

―チャイナ・プラスワン？そりゃ日本だろ！―

旭硝子（株）

前 田　敬

Report on Memorial Lecture of NGF's 3rd General Meeting

Kei Maeda

AGC Asahi Glass Co. Ltd.

講演風景

橋本久義教授

2013年6月4日，ニューガラスフォーラムの定時総会の後，恒例の記念講演が行われた。今年の講師は政策研究大学院大学の橋本久義教授。元通産省で，フォーラムの上杉専務理事とご一緒に仕事をされていたとのことである。講演タイトルには「日本中小企業の行方」という文字が並んでいるが，前半の内容はほぼ国政と国内経済に関する解説だった。それを面白おかしく，とても元気が出る語り口でのお話し。後半は，日本の中小企業が今後元気を取り戻すことが間違いない，ということが（麻雀を例えに）明確な根拠を持って語られた。異色と言ってしまえばそれまでだが，巧みな話術に思わず引き込まれる，素晴らしい講演だった。ライブの雰囲気をそのままお伝えできないのはまことに残念であるが，以下に講演概要を記する。

【日本の経済について】

講演タイトルの臥龍とは，ご存知三国志・諸葛孔明のまたの名であり，これから飛躍を遂げるべく登らんとする龍が，伏せっている状態。演者は今の日本がまさにこの状態であると説

〒221-8755　神奈川県横浜市神奈川区羽沢町1150番地
TEL　045-374-7493
FAX　045-374-8883
E-mail : maeda@agc. co. jp

く。

今の日本経済で物議を醸している話題は以下の通り。

・欧州経済
・TPP
・中国反日運動
・超円高，増税，放射能，電力不足

これらに対して演者の見方は以下の通り。

欧州経済は決して壊れない。何故なら壊しても得をする人がいないから。TPP への参加は政治的な要素が大きい。例えば，アメリカは日本の軽自動車制度を快く思っていない。日本の法律に今は口出しできないが，TPP へ参加すると，国を相手に訴えることが出来るようになる。しかし，米–中で TPP という事態にならないためにも，日本は参加を検討する必要があると説く。中国は反日デモもやるが，日本製品が良いことは良く知っている。しかし，日本企業が狙われるリスクがあることも確かである。むしろ中国一辺倒のリスクに気づくきっかけにするべきであるとの意見。

ところで，中国の勢いは確かにすごい。高速道路の建設を例に取ると，アメリカが 90 年かけて建設した延べ距離数が 11 万 km であるところを，中国は 1996 年から現在までにすでに 7. 5 万 km を建設している。中国は国土が全て国有で，誰かが投資をすると国が儲かる仕組みになっているので，インフラ整備のスピードは他の国とは違う。このような事情はあるが，感心せざるを得ないのは確かである。

日本国内ではアベノミクスが功を奏して，円高の動きは緩和している。原発はこれ以上悪くはならない（良くもならない。危ないが頼りになる DV オヤジのようなもの）。懸念されるのは電力不足と増税による値上げ。この辺を日本の首相がどう采配するかがカギだろうとの見方が示された。

ここで，理想の首相論がしばし展開された。まず，田中角栄氏。様々な語録がある。「他人のために汗をかけ。泥をかぶれ。そして誰も見ていないところでそっとぬぐえ」は名言である。演者は昔の仕事柄，歴代の首相と接する機会が多かったため，いくつかの逸話も紹介された。昭和 46 年の 12 月 30 日，来年度予算の概算要求も終了し，仕事納めの日，田中角栄氏が庁舎にいきなりやって来て，17 名の守衛さんと「1 年間ご苦労様。ありがとう」と握手をして帰った。それだけの用事のために来たところが凄かったと紹介された。小泉首相とロシアプーチン大統領が協力してフランスでのサミットの日程を調整したり，北朝鮮の拉致問題で金正日に働きかけた逸話なども紹介された。論調としては大物政治家が出なくなったことへの憂いも感じられたが，それよりもむしろサラブレッドの安部首相に対する期待の高さを感じさせる語り口だった。

このような話の展開の結論として，中国はもちろん発展するが，それに加える国があるとしたら，それは間違いなく日本であろう，との見解が示された。

【日本の中小企業の行方】

演者はこれまで 3940 社の中小企業を実際に訪ねた実績がある。その経験から，上記の日本経済の今後の分析も踏まえて，日本の中小企業がますます元気になる根拠が述べられた。

まず，日本の会社は，ブラックホールに吸い込まれそうになった際の社長の対応が，欧米の社長のそれとは異なることが示された。欧米の社長はある言意味あきらめが良い。対して日本の社長にとって，会社は我が子同然。だから赤字になってもそう簡単にはつぶれない（つぶさない）。したがって，アメリカで作り切れない精密機械の部品などは，日本の中小企業に仕事として回ってくると演者は考えている。

次には各国の社長が麻雀の卓を囲んだ例え話（実はここが一番面白かった）。

・アメリカ人社長は男っぷりが良くて，みっともないことが嫌いなので，ツキがないとみる

や，ゲームを止めて帰ってしまう。
・ヨーロッパは基本的に天気が悪く陰気なので，社長さんも機嫌が悪い。儲からなくなって天棒が半分になったら，従業員も半分に，という縮小均衡の考え方。小さくなるので，不況を脱してからあとも元の生産量に戻れない。
・やっかいなのがアジアの社長さん。無駄に楽天的で，負けが込んでも能天気。勝てないのはおかしい，ということでルールの改正をしかねない。
・対して日本の社長は粘り強く，勝つまでやめない。

もちろん比喩であるが，妙に納得する話であった。

もうひとつ，日本のモノ作りが強い理由。中国の会社では従業員の入れ替わりは日常茶飯事である。聴衆の皆さんに聞いてみたい質問が，「あなたが工場長で，短くて1日，長くても3年で従業員が入れ替わる工場で，いいモノを作り続けられる自信自身がありますか？」確かに日本の会社が一番元気であると思わせるに十分な話であった。

最後に，日本の中小企業の中で，特に元気が良い会社が，そのキーワードと共に紹介された。最後は多少時間が押してしまったのが残念だったが，なるほど元気の良い会社は日本にたくさんあるのだと，納得する話であった。